



一、おしハ九羽松浦の竹某あゝゝの扱も  
 多れーりーつーいい開乃信次と  
 中志地心ハまのせ口論し合するふ款  
 を及討て作去あゝゝ科人の子にさ  
 間おゝ就舎子坊てい波若大剛れさ  
 にゝゝる番の事堅く付るやと  
 なるに誰のあはシヤシ河あゝゝ

甲

波を大かゝり者しくある番の事  
かゝく仕とく ツカレ 長くしつよ工作  
清沢う今夜就をやうぬきてト  
まふと清沢う就よりぬけとれと  
う言活ら所の手扱とて寂前より  
かゝるや付て方に左様は油以仕と  
あかそぼくうれ者の子きながり

ツカレ

りや子きながり 甲 時未ハる記

ツカレ

それハウ座作 甲 さあゝる意くその

女をつれてありとく 三行 長く 科人

新うこめらねい 甲 ちる女まきれ

甲

赤羅科ハあまらよ 甲 情あうこま  
うに女 甲 母の女 甲 妻乃清沢ハ  
を被里う勢ぬ 甲 支ぬ 甲 の 甲 ち 甲 せ 甲 ぬ

事ハあれ候一まじきにせし  
 ともよむに候一まじき候に候一我々の大  
 すのよむに候一まじき候に候一作をけれ  
 づらるるに候一まじき候に候一程子夏  
 みの志に候一<sup>中</sup>まじき候に候一何と申とも  
 志に候一まじき候に候一落居の何  
 らし程に候一まじき候に候一就舎こそ

其の可なり候一まじき候に候一<sup>上</sup>今の女  
 以て立て候一まじき候に候一<sup>下</sup>知能なるを  
 志とて候一まじき候に候一<sup>下</sup>情を  
 とり思へ候一まじき候に候一<sup>下</sup>料との  
 報いの程に候一まじき候に候一<sup>下</sup>あ  
 りまじき候に候一<sup>下</sup>女に向ひ候一まじき候に候一  
 其の悟成り候一まじき候に候一<sup>下</sup>清次を候一まじき候に候一

ふりひくもろく行論とよんち勢と掛

く一対修く時をう修て番を仕と

空や修れうらにあれも多ハ外あり

忍くつらし修めを袖よたまらぬ

志く玉る人をとぬぬめ乃がみさうお

らや言活る所死中玄女う相氣す

成て作修くは由をすさよせらるはら

早  
うたや上と死中の女う以外相氣は

早  
是ハま一としくあおらうあんと

意不便やたらうえたうはうはら

わありま女行坂さや一に相氣一ヶ

上  
まうあまゆ人相氣まうそと承る

大れう修乃むさう風の相はう故

もあるうはりしや借若同穴と興し

書き込束ちりて跡を身まてるに  
りこち跡をうぬ統のうらまひを  
圖のきしりてなさにあよる家ふハ  
この事り 四書 定むるものつれ統

舎のがひりうあぬえれ款き子  
およる家ふハ理り也去ちりり何々  
お書れりり何とちりき及れりよし

とてはハ統りりも海りり直  
二書 是ち保を覺えぬおの綴り  
妻のあし前をぬれりて顯り  
書きこしなる海心うま書けり所  
所養うつふもちりぬおを 四書 かり  
お女のついにととれと平つり統書  
戸をくまきまむるもさしとて出

心こころも有難ありがたけれはげまにあか

ままるはたたるまきな此ころのうらをな

出いましやは是この形見えるありや

をあんや我わのまのまにうりされ

流なるうらづのゆや雨の夜れは

ぬる蔭かげを集めして西楼ろうに月落くたる

言いもうしてなる其まのまのまのまの

のころにてこのまのまのまのまの

言い活かちのちのちのちのちのちの

ままのころにてこのまのまのまのまの

ままのころにてこのまのまのまのまの

ままのころにてこのまのまのまのまの

ままのころにてこのまのまのまのまの

ままのころにてこのまのまのまのまの

あゝる柳の髪りまゐる乃 上巻 幽子むせ

ふ心うれ 二二 あゝくそむる鼓ハ何ぞ

鳥子樹らけては 四 あれこゝを待つ

のうらたを志ふあひけの鼓と 三 面白

志く吳國も去たなり 三 あるが極

ふつとを 下巻 りきく時分も早事

あゝ其心を 下巻 られ死平に耐守れ

あゝ守鼓 二二 ちきけり侍り成ぬ君

あゝさう 二二 遅くも君うこし道玄

あゝ此鼓と 二二 打て心、耐三ふ作と

あゝま 二二 りれ事名極少り 二二 らくなく

あゝ 二二 休人 二二 け 二二 の 二二 舞 二二 も 二二 身 二二 に 二二 ち 二二 ち

あゝ 二二 鶯 二二 け 二二 青 二二 紫 二二 の 二二 竹 二二 湘 二二 浦 二二 乃 二二 じ 二二 ち

あゝ 二二 嫁 二二 皇 二二 女 二二 英 二二 諫 二二 鼓 二二 若 二二 む 二二 と 二二 此 二二 乃 二二 り 二二 み



上  
うづもるやぬいづりや  
も時ありてく日平西山  
かけちよろ乃をもちつ六の鼓  
字ふふ心乃鼓ハ偽里の琴  
あはれままとれりるれり  
にりあとも母の心乃わり  
いふややくと四の鼓ハ世中

上  
かぐととちもるる  
もる又習いする及獨り抱ハ思り  
九律のく夜半ふも成らや  
恋ハ秋妻の面影はたふら娘  
せりききに身りりり立く  
二世のういも有へき此流也  
あはれままとれりるれり

わのみのみ鏡 此のこころ 此より当新の八幡

七法知見ありし夫婦を子たをを存と

まやとく山と 三つた 京への上るこまね

とては偽ハよもあ〜 誠ハ妻れり

可飛前以宰府子知人あま及り

一ひいてやん覧 早まきル 一の隠さ

申しる 詩 志しとせし年ハ我親れ十三と

ふあよりきれ まきル 科ありきと

きふね 早 松浦乃門やうれ海

うれ國ち 早 極樂の 孫後誓願

若ちうい 早 科をたまきはありし

まの魚を 早 難の清慈虫 下 ねく時日

輝うつさ 早 ずく 下 新書と巻

ほもとの 早 ことく 下 に入りおと



